

多種職連携における保護者を中心としたチーム支援のあり方

—骨形成不全症の幼児の子育て支援の事例を通じて—

How team support should be centered on parents in multidisciplinary collaboration
—Through the case of child-rearing support for infants with osteogenesis imperfecta—

加藤 裕美子

Yumiko Kato

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：多種職連携，チーム支援，骨形成不全症，子育て支援

Key words : Multi-disciplinary cooperation, Team support, Osteogenesis imperfecta, Child care support

1. 研究目的

骨形成不全症は、稀少難病で確立した治療法はなく、疾患の理解が困難であり、頻回する骨折など対応に苦慮する場合が多いとされている。保護者は、不安や悩みを共有できたりする人が身近にいないため、試行錯誤しながら子育てに取り組んでいると予想される。

一般的なチームによる支援や相談のスタンスは、リスクや支援ニーズを特定する医療関係者から語られることが多く、あくまでも子育て家族は、支援の「対象」である。しかし、保護者自身が「対象」のままでは、自分の状況や子育てについて、自主性をもちながら自ら望むことなどを語る機会は提供されない。

このような背景から、今回、オープンダイアログの実践を参考に、チーム支援会議に専門職と共に、保護者が当事者として参加することを考えた。そうすることで、参加者がお互いに子どもの成長を願いながらコミュニケーションを取る機会ができ、保護者が少しでも安心して子育てができたり、他の援助チーム関係者もそれぞれの役割の違いを知ったりするなど、意識に変化が見られることが期待される。

そこで予備研究では、骨形成不全症の子どもを養育する母親の子育て観の特徴及び乳幼児期から求められる支援や現状、及び課題を明らかにし、本研究では多種職連携において骨形成不全症の子どもを養育する保護者を中心として、子育て支援につながるチーム支援会議を実践し、参加者の意識の特徴を明らかにするとともに、チーム支援会

議の効果と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

2-1. 研究方法

(1) 予備研究

3名の母親を対象に半構造化面接を実施しSCAT法を援用して質的分析を行った。

(2) 本研究

子ども（Aくん：1歳5ヶ月）が重度の骨形成不全症で家族が医療的ケアを担い、母親Aが就労のため保育園に入園した支援の事例（Aくんとその家族）を通して検討する。

多職種連携のチーム支援会議の参加者（保護者・保育・医療関係者）計6名に対して、チーム支援会議開催前後に半構造化面接及びチーム支援会議を2回実施し、SCAT法を用いて分析した。

上記の半構造化面接、チーム支援会議はコロナ感染予防対策のため、全てオンラインにより実施した。

2-2. 倫理的配慮

本調査は、「大妻女子大学生命倫理委員会」より承認(受付番号 02-016-1)を受け実施した。

インタビューの音声は、Zoomによる機能を使った録画はせず、音声はネットワークから切り離されたICレコーダーで記録した。データの収集と取り扱いについては、協力者から了承を得て、対象となる個人が特定されないように十分注意した上で表記した。

2-3. 結果と考察

(1) 予備研究

骨形成不全症の子どもを養育している母親は、

他の障害児の子育ての状況と違い、骨折する危険性が高いという特有の障害特性によって、さまざまな困難や苦悩を抱えて子育てしていることが明らかになった。また骨形成不全症を養育する母親への支援の現状と課題として、「出産前から疾患の理解や安全な育児の習得だけではなく、未知の障害と出会い不安な気持ちの父母に寄り添いながら、家族の目線で支える支援の必要性があること」「親の思いに寄り添った支援や存在というのは、単に共感や親和性を示すだけでは不十分であるということ」「医療面以外の相談できる相手が必要であること」「母親に寄り添いながら支える支援は、骨形成不全症の頻回な骨折という障害特性の大変さを理解しながらも、子どもの潜在能力を最大限に引き出すような提案をし、価値観を共有できる存在であること」などが明らかになった。

(2)本研究

保護者を中心としたチーム支援の効果とし「参加した医療・保育の専門家は、保護者の能動的な発信を受けて、支援主体の子どもを養育する保護者の存在を意識し、療育・保育それぞれの支援のあり方を再考することにつながったこと」「保護者の子育ての不安や悩み、子育てに対する考えを聞くことは、親としての成長を感じると共に成長過程の捉え方の曖昧さなど、課題も把握することができ、親自身も医療・保育関係者から話を聞くことにより、我が子の成長を客観的に捉え直す機会につながったこと」「保護者が障害受容に至るまでの子育ての苦悩を話したことにより、医療・保育の専門家もそれぞれに内省しながら、肩肘張らず、率直な思いが語られたこと」「保護者自身がチーム支援の中で、自らの思いを率直に発信することの意味を捉え直し、必要以上に孤立感や負担感を背負わない子育てにつながると気づき、その重要性に気がついたこと」「医療・保育の専門家、保護者、それぞれがさまざまな観点から相互コミュニケーションすることにより、多角的な視点から子どもの姿を捉え直し、子どもを取り巻く社会関係にも視野を広げて考えることができ、自らの専門性を再認識することにつながったこと」などがわかった。

以上のことから、保護者がチーム支援会議に参加する効果として、子どもや保護者の問題状況の解決だけでなく、参加者は自らの視点から育児、療育、保育を見つめ直すことができ、さらに相互コミュニケーションを取ることでそれぞれに新たな知見を得ることができたと考えられる。

保護者が参加したチーム支援会議の課題として、「保育・医療の専門家が共通して感じたこととして、保護者の存在を意識したことにより、チーム支援会議の中で質問や発言に躊躇することがあったこと」「多種職連携には人が集まれる時間が必要であるが、就業形態が異なるため、チーム支援会議の日程調整は非常に困難であること」「医療・保育関係者は、チーム支援に対する見通しがもてないため、当事者として参加意識をもち、積極的にチーム支援会議を活用していこうとする意識には至っていないこと」などが示された。

3. まとめと今後の課題

本研究で得られた先の課題を解決するためには、チーム支援会議の経験を積み重ねていく中で、参加する当事者として自らが保護者や子どものためにどのような役割を果たせるのか、それぞれに思索を深めていくと考える。継続し事例を積みあげていくことにより、チーム支援に対する参加意識が高まりチーム支援の有効性が示され、チーム支援会議の意義と課題がより明確になるといえる。

今後の課題として、以下の2点があげられる。

1点目は、今回コロナ感染対策により、全てオンラインで実施したが、相互コミュニケーションについては対面時と大きな相違は感じられず、また多忙な参加者のスケジュールの調整には有効であった。しかし、有意義なチーム支援会議のためには、保育、療育それぞれのイメージの共有化が必要不可欠であり、オンライン上の言語表現だけでは困難である。そのため、オンラインの特性を生かした映像や写真などを有効活用するなど、工夫を重ねていく必要があると考える。

2点目は、子どもの成長過程とともに広がっていく保育園等での生活に焦点をあて課題を明らかにすること、そして地域での包括的な支援の在り方についても大きな課題といえる。

4. この助成による発表論文等

特になし

引用・参考文献

- [1] 檜木野裕美 (2017) 慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」の様相. 大阪府立大学看護学雑誌 23,59-65.
- [2] 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで. 名古屋大学出版会.
- [3] 奥野雅子 (2014) チーム支援における異分野の専門家間の関係性についての一考察. 岩手大学人

文社会科学部紀要, 93,1-13.

[4]石隈利紀 (1999) 学校心理学. 誠信書房.

[5] 赤嶺颯子 (2006) 骨形成不全症における父母の自立を支える援助-父母の思いにそった段階的な家族支援-.小児看護 37,11-13.

備考

大学院生研究助成申請時の課題名は「骨形成不全症の子育て支援～多種職連携によるチーム支援を通して～」である。しかし、本研究では子育て支援につながるチーム支援会議を実践し、参加者の意識の特徴を明らかにするとともに、チーム支援会議の効果と課題を明らかにすることを目的とするため変更した。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和3年度大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2107)より研究助成を受け実施した。